

地域の会 5/26 発電所視察概要

日 時	平成25年5月26日(日)13時～17時
場 所	<p>〈安全対策説明 等〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京電力（株）柏崎刈羽原子力発電所ビジターズハウス <p>〈視察〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○6号機サービス建屋、原子炉建屋、コントロール建屋 <ul style="list-style-type: none"> ・水密扉、非常用バッテリー、非常用発電機 ・オペレーティング・フロア（ギャラリー） ・中央操作室（ギャラリー） ○構内 <ul style="list-style-type: none"> ・防潮堤、防潮壁、電源車・消防車等 ○免震重要棟 <ul style="list-style-type: none"> ・止水シャッター、非常用発電機、免震構造、緊急時対策室
視察参加者	<p>－委員－</p> <p>浅賀・新野・石坂・佐藤・三宮・高桑・高橋（武）・高橋（優） 武本（和）・武本（昌）・内藤・中原・・・12名</p> <p>－東京電力－</p> <p>横村所長・長野副所長・新井副所長 西田リスクコミュニケーター・佐野地域共生総括グループマネージャー 地域共生総括グループ 権貝・地域共生総括グループ 山本 松本原子力改革特別タスクフォース事務局長代理</p> <p>－事務局－</p> <p>広報センター 須田業務執行理事 ライター 吉川</p>

- 原子力発電所の安全対策、津波対策及び原子力安全改革プランなどの説明を受けた。構内は6号機建屋や免震重要棟などの視察を行った。質疑応答及び委員感想を以下にまとめた。

質疑応答

〈委員Q〉

原子力安全改革プランは、本当にこういうことをやれるのかと心配があるので、具体的に2つ質問したい。

1つは、フィルターベントの設置について。行政に説明し、理解を得たのか。東京電力が勝手にやっているのではないのか。

1つは、断層の議論について。直下の断層が動くのではないかということが以前から議論になっていたが、動くことを前提に対処することは考えられないのか。

〈東京電力A〉

フィルターベントを設置することは県にも説明しているが、まだまだ足りないところがあると思うので、みなさまからご意見を聞きながら丁寧に説明していきたい。

断層については、もし断層が動いたらということを考えればいいのではとの指摘があったが、動くとは仮定して、どういうふうに動くのか、何が起こるのかという評価も、我々東京電力の自主的な安全評価といったものをしていかなければと思っている。

〈委員Q〉

電源車にはネズミ等が入らない対策は取られているのか。

〈東京電力A〉

電源車のところではネズミ対策はできていない。大きな地震が来ると、その振動で電源車が上方向に飛び上がり、長さに余裕がないと繋いであるケーブルが切断する可能性が高いと考えているため、どうしても露出部分はある。また、いつも動いている設備ではないので、ネズミ以外の理由で壊れる可能性もあるので、それを見過ごさないようにパトロールをしっかり行っていく。

〈委員Q〉

免震重要棟には食料品や毛布等の備蓄はあるのか。

〈東京電力A〉

非常災害対策要員600名の約8日分の備蓄がある。

〈委員Q〉

以前、構内に入った時はすごく綺麗で手入れが行き届いていると感じたが、今日は雑草等も散見され、費用の関係なのか手入れがされていないと感じた。

〈東京電力A〉

ご指摘の通り手を入れられない状況。とはいえ、雑草も放置していると3年前のように真夏の暑い時には野火が発生する危険もあり、そういったところを中心に手を入れている。お見苦しいところもあるかもしれないが、社員等で手入れをしたいと考えている。

〈委員Q〉

「原子力安全改革プラン」の中には、福島第一原発災害の除染対策について入らないのか。

〈東京電力A〉

今回の報告書は、何事故が起こってしまったのかと、それを解決するためにはどうすればいいのかを纏めたもの。除染の取り組みや賠償の話は、この報告書に入っていないが、会社として全力で取り組む方針に変わりはない。

〈委員Q〉

基準地震動の策定の仕方が一番気になっている。佐渡海盆東縁断層を含めた策定の仕直しは考えていないのか。

〈東京電力A〉

様々な調査の結果、佐渡海盆東縁断層は断層ではないという調査結果が得られたので、S sの策定では長岡平野西縁断層帯、F-B断層を考慮して策定した。

今、日本全体で断層か活断層かとの議論があり、柏崎もそういう議論があると思っている。規制委員会でも見解が示されると思うが、我々は今までの調査結果を真摯に説明していきたい。

意見・感想

〈委員〉

視察に参加し、2点の質問と意見を述べた。

1. なぜ、東電は放射能を環境に放出するベントを勝手にやるのか

従前は、原発は、敷地外に迷惑をかけるような事故は起こさないとされ、建設されてきた。その原発を、東電が県や市・村との安全協定を無視して、独断で、事故時の放射能環境放出のベント工事に着手したとの報告があって驚いた。このベント問題に、地域の会で新潟県にも質問した際は、「協定対象との認識だが相談はない」との回答だったと記憶している。

ベント工事に関して、協定に基づく協議はしたのかとの質問に、所長は話している旨の回答だった。協定に基づく相談の前提には、原発以前から周辺に住む、安全に安心して暮らす権利を持つ住民の理解が必要はずだと考える。東電が勝手に行える行為ではないはずだと考える。

東京電力とは十数万人（避難者数）の生活を奪い、避難者外にも放射能を浴びせ続け、不安な生活を強いている、日本史上例のない犯罪組織だと考える。その組織と構成員が、独善的に、放射能を自然環境に放出するベント工事に着手したことは断じて許せない。福島やその周辺の多くの人たちに犠牲を強いる事実を放置して、「豊かな生活を享受し続ける」東電社員は人間の心を持っているのだろうか。その心情を明らかにして欲しいと考える。

新潟県と柏崎市・刈羽村は、住民の安全安心をすべてに優先させる責任があるはずで、東京電力のベント工事で独善的対応を放置・無視することは許せないことだと考える。

2. 直下断層問題で、動くことを前提の評価をしないのか。

しばしばテレビに出演していた松本氏が「福島原子力事故の総括および原子力安全改革プラン」を説明した。その記載事項と説明内容は、弁明に終始し居直りともとれ従前の東電見解（津波や過酷事故をすべて想定外としたこと等）とは全く異なるものだった。

その一方で4. 18の安田層調査がなされ、施設直下の α β 等の断層は動かない（動くことは想定不要）とするものだった。4. 18調査報告は、学会や教科書の見解と異なる層序を主張したり、段丘区分の通説を無視し、昨年の保安院意見聴取会の指摘にも答えない、支離滅裂のものだと認識している。

よって、「安全改革プラン」の『想定外を考える』と「4. 18安田層調査」の『直下断層の活動は考えない』は矛盾するのではないかと聞いた。

所長は「東京電力として直下断層が動いた場合の影響を検討評価する」と答えた。

議論を聞いていたマスコミ関係者から、「所長が初めて直下断層の活動を検討すると言ったが」と問われた。

敦賀や東通原発で敷地内の断層問題が議論されている現在、柏崎刈羽でも廃炉に向けた施設直下の断層や褶曲活動が継続しているか否かが、最大論点となると確信した。

〈委員〉

・今回は防潮堤がほぼ完成していた。

大変な資金と労力が注がれてのことだろう。タスクフォースの内容にもある通り、理解や納得の得られる説明とはどんなものか。社内一丸となれるよう期待する。

・防潮堤の高さや構造、傾斜など2タイプのスタイルとつなぎ目があった。素人の感覚では、津波の破壊力を現場で見ているため、ただ見学して説明を受けただけでは不安が残る。

この説明に、もっと分かりやすい例などを加え、力の関係等を説明できないものかと感じた。(前向きに納得できるための説明に、まだできることがある様に感じるのだが…)

※何か良いアイデアを社内コンペしてみては？

〈委員〉

半年ぶりに柏崎刈羽原子力発電所の構内に入った。昨秋に視察に入った時よりも大幅に防潮堤の工事は進んでいた。

東京電力として再稼働に向けての努力をしていることは分かったが、事故を起こさないための完璧な対策として評価できるかどうかは判断できない。

また今回の視察で海水熱交換器が用意されたことや原子炉の上部を冷却するという設備の設置は初めて聞くような気がした。

今後の対策としての格納容器のフィルターベントの設置が計画されたり、緊急時の第二操作設備などはどのようになるのか詳しい説明が無かった。

いずれにしても福島事故の検証の上に立ってそのすべての総括がなされることが重要で、経営的な判断で再稼働を急ぐようなことのないようにして欲しいと思った。

〈委員〉

・柏崎刈羽原発安全対策取り組み状況を見学して

防潮堤、防潮壁、水密扉、電源対策等、現場での取り組みの熱意は伝わってきました。福島事故を教訓にした津波対策・全電源喪失事故対策は整っているかには見えましたが、実際の場面でうまく機能できるのだろうか、気にかかりました。

地震対策はどうなのか？ 次なる地震にこの原発は耐えられるのか？も心配です。

地震に関して、県の「地震、地質・地盤小委員会」で、佐渡海盆東縁断層が指摘されていました。安全確保のためには、この指摘を考慮に入れた基準地震動 S_s を策定し、それに基づいた耐震対策が必要なのだと思います。現在行われている対策だけでは、安全は片手落ちだと感じました。

- ・福島原子力事故の総括および原子力安全改革プランをお聞きして

よく練られた改革プランが示されましたが、実を伴っているのか疑問に感じました。福島原発事故対応に東京電力の責任ある対応が見えないためか、多くの言葉だけが並んでいるように思えてしまうのです。

福島原発事故では、放射能の放出は続き、汚染水の解決策は難航、多くの問題を抱えたままです。とりわけ、働いている方々の被ばく対処や、放射能汚染により家に帰ることが出来ずにいる方々の賠償の取り組みに、誠実な対応がなされていないのではないのでしょうか。

福島事故にまつわる多くの問題解決に、安全改革プランに見られる細部にわたる丁寧な対応姿勢を発揮して欲しいと思いました。

〈委員〉

福島事故から 2 年が過ぎ、柏崎刈羽原発も安全に対する取り組み、すなわち津浪対策や電源喪失対策に対する備えが着々と整いつつあると視察を通じ感じました。これは 2 度と事故を起こしてはならないという考えから、当然備えていかななくてはならないものだと感じます。

しかし事故がもし万が一起きた場合の対策は十分だろうか。福島のようにメルトダウンし、放射線が拡散するような事故が起きた場合の対策は本当にあるのだろうか。

火事が起きた場合に消防で言ったら水をかければ火が消えるのだが、放射線事故が起きた場合にどのようにしたら放射線の拡散をとめることができるのか。本当に閉じ込めることはできるのだろうか。起きてはほしくないが、そのような対策を何重もの備えで今後とも対応してほしいと思います。

〈委員〉

事故後 2 年 2 カ月を過ぎても福島第一原発の重要設備は仮設だらけではないのか？ そんな思いを持ちながらの視察でした。

近くで見れば異様な高さを誇る防潮堤。これ自体東電の「施設運営計画」等にもとづくものなのか。防潮堤だけはどう見ても仮設ではないと実感させられましたけれど、高台にあった電源車は野ざらしとなっていました。特に海に近いための塩害対策も講じられてはいないようでした。またその説明もありませんでした。「ネズミ」や「鳥が巣をかける」のが容易にできそうなことも気にかかります。仮設の設備はあくまでも仮設であるから、強度や耐震性が国の基準を満たしたものになっているのか疑問を感じます。

一昨年 10 月の原子力安全・保安院（当時）の会合では、複数の専門家から、「仮設の設備は、本設に比べてどうしても信頼性が落ちる。弱点をきっちり把握して、仮設のものは新しく、より信頼性の高いものに換えてゆく必要がある」と指摘されていたことを想起します。

東電は事故後、原子炉注水のための常用ポンプ 3 台と非常用ポンプ 3 台を設置しているようですが、すべて仮設のトラックの荷台上に置かれていると言われています。このため昨年一月には非常用ポンプが凍結するなどのトラブルがたびたび起きているのではないですか。トラブル続きでも本設に切り替える予定はないのか？ 柏崎刈羽原発の地震による事故対応が仮設のままでいいなどとはとても言えないのではないかと思います。

ネズミの侵入による大規模停電事故も仮設の配電盤が事故原因であったことをどう思っているのか。規制庁と東電には説明を求めたいと思っています。

〈委員〉

暑い日でしたが、久しぶりの発電所視察でした。

今回は安全対策としての津波対策、電源・冷却確保、耐震強化工事、免震重要棟等を見学し、向上している事も確認出来ました。

その後の安全改革プランでは、問題点の対策や決意を説明されましたが、住民の目線は厳しくなっていると思います。

〈委員〉

約一年ぶりの構内視察だったが防潮堤建設を始め様々な災害対策が予定通り進んでいることを確認できた。

視察箇所でも最も印象に残ったのは中越沖地震を機に整備された免震重要棟だった。

地下の免震基礎の構造や外部からの放射性物質侵入を遮断する空調設備など、福島第一でもその機能を発揮した設備を今回初めて確認することができたが、当発電所が他と比較して大きな規模であることを考慮すると改めて計画されている第二免震棟の必要性を感じた。

「福島事故の総括と原子力安全改革プラン」の説明では、福島事故ではハード面の欠陥のみならずソフト面でも事故への備えが不足していたという事実を改めて認識した上で、ソーシャルコミュニケーション室の創設やリスクコミュニケーターの設置など、平常時からのリスクコミュニケーション活動の充実を大きく取り入れた対策内容の説明だった。これらが正しく有効に機能することが立地地域での地域住民との信頼感の醸成には不可欠であることは間違いない。東京電力の今後の着実・確実な実行を期待したい。

と同時に、コミュニケーションというものは片方からの一方的なものではなく双方が互いに理解し合おうとする意志と行動が必要だと考えている。発電所稼働に対しての賛否は分かれるが現実に関ここ存在する発電所の安全は全ての共通の目的として良いと考える。細かい手続きの違いや手法の変化などはその安全という目的を実現するための過程として理解したい。

また、上記の改革プランに当会のこれまでの活動が少しでも寄与したところがあるのであればこれまでこの会に参加して感じていた徒労感も少しは解消される思いである。

〈委員〉

原子力発電所の視察を終わる度に思うのだが、この巨大施設が災害等で損傷を受けることは、大変な事だと実感せざるを得ない。まして、2年前の福島第一原発の災害の後には余計である。

防潮堤、防潮壁等の設置を目のあたりにしてもやはり不安は残る。相当の費用を投じて大急ぎで出来たものの、地盤（活断層 etc）の問題もすっきりしない。福島原発の収束もまだである。多くの問題を残している。

あつてはならない原発災害であるが、当地に世界規模の原子力発電所がある限り、日々、防災について考えなくてはならない。事業所はもちろん、原子力発電を推進してきた行政にも、責任を持って住民の安全を優先に考え、防災を色々な角度から進めてもらいたい。

〈委員〉

あの防潮堤がほぼ完成していることを鑑みると、地震や津波に対する各種対策が実施されおり、再稼働に向けた準備が着々と進められていると感じました。